

法然上人絵伝の出生場面を読む

『善導寺本』を中心に

平間 尚子

はじめに

法然上人の行状を記した作品は多数あるが、絵伝として最も古いのは『法然上人伝法絵』（以下、『伝法絵』とする）である。『伝法絵』は原本を佚しているが、転写本が二本現存する。一つは『国華本』（断簡）で、もう一つは浄土宗大本山善導寺（福岡県久留米市）に所蔵されている『善導寺本』である。今回は上人の出生場面を考察対象とするので、『善導寺本』（上巻）を扱う。

その第一図には、次のような絵が描かれている。この絵は法然上人の母・秦氏の出産場面を描いており、複数いる女性は妊婦秦氏のお産に立ち会う者で、すぐ隣では僧侶による祈祷が行われている。外に目を転じると、弓を構えている武士がいる。この武士は、何をしているのだろうか。

この素朴な疑問を解決するために、法然伝各種と比較を試みたところ、多くの法然伝の最初にこのように外で弓矢を引く武士が描かれていることが分かった。さらに、この武士の解釈を進める中で、

筆者は『善導寺本』の上巻末尾にある和歌二首と密接な関連があることに気が付いた。

そこで本稿では、『伝法絵』系統の作品を中心に出生場面を比較検討し、巻末の和歌の解釈と両者の関係について私見を述べてみたい。はじめに、各種法然伝の「出生場面」を紹介する。

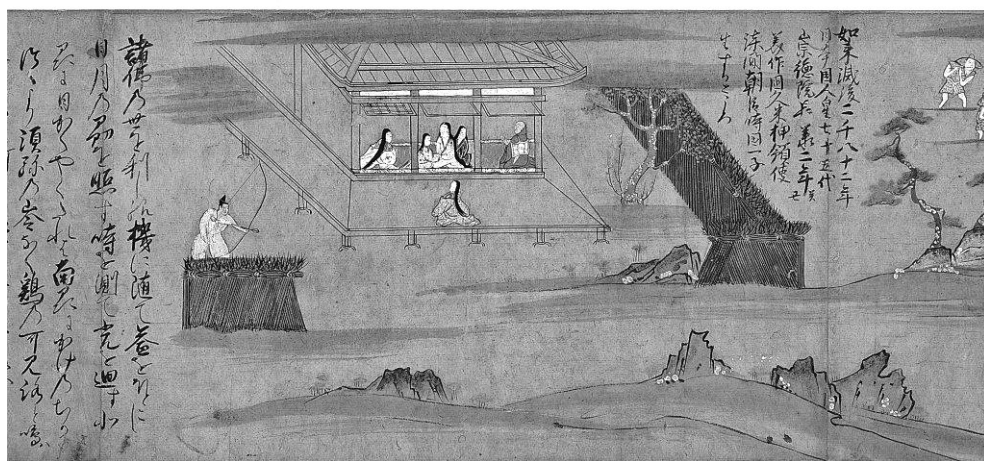
一

一一 『善導寺本』第一場面

『善導寺本』第一図には、田植え歌に併せて苗を植える農作の様子が描かれる場面に連続して、もう一つの絵がある。次頁の【図一】で、そこには、部屋の中に女性が複数名と祈祷している僧侶、外に弓矢を構えた武士が一名いる。

そして、画中詞には

如来滅後二千八十二年 日本国天皇七十五代 崇徳院長承二年
美作国久米押領使 漆間朝臣時国一子 生するところ
とある。¹⁾



福岡県指定文化財

次に、同系統で制作年が下る『琳阿本』や『拾遺古徳伝』の詞書と図画の様子を示して、比較してみたい。

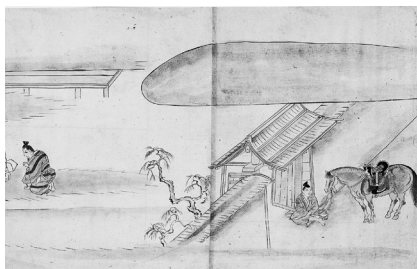
一一『琳阿本』（妙定院蔵）出生場面

（本文）

如来滅後二千八十年、人王七十五代、崇徳院の御宇に父美作國久米の押領使柴間朝臣時國、母秦氏、子なき事をうれへて夫妻心をひとつにしてつねに神仏に祈る。妻の夢に剃刀をのむと見てはらみぬ。夢見るところをもつて夫にかたる。夫のいはく、汝かはらめる子さためて男子にて、一朝の戒師たるへき表事也。それよりこのかた、その母ひとへに仏法に帰して、出胎の時にいたるまで、羣腥ものをくはす。長承二年癸丑四月七日午ノ正中におほえすして誕生する時、二のはた天よりふる。奇異の瑞相也。権化の再誕なり。見るものたなこゝろをあハす。

〈図画の解説〉

門の外に馬とその手綱をもつ男（折烏帽子に水色の衣）がいる。家の中に向かって祈禱をする男性三名は、白の狩衣に立烏帽子の男、水色の衣に折烏帽子の男、僧侶（墨染めの衣）である。その左側では、上が緑、下が赤地の衣で左上半身を露出し弓を構える武士一名と、白装束の陰陽師、陰陽師の持つ札を受け取るうとしている男がいる。家の中は、向かって右側の部屋に祈禱をする僧侶と茶色の衣の男性、左の部屋に妊婦の秦氏と介助する女二人、口元を隠す女性を描かれている。女性の衣服は白で統一され、白縁の畳が用いられている。屋根の上には両幡がたなびいている。



東京都港区指定文化財

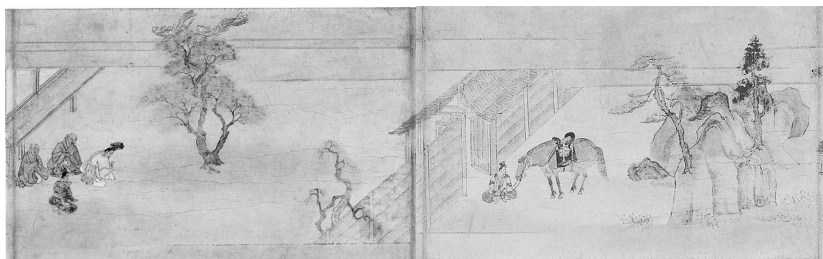
一一三 『拾遺古徳伝』(常福寺蔵) 出生場面

(本文)

爰如来滅後二千八十四年、人王七十五代、崇徳院の御宇に當て美作國久米南條稻岡庄に一人の押領使号染間時國あり。年来のあひた孝子のなきことを愁て、夫婦心をひとつにして佛神にいのる殊観音云々。或時妻秦氏、夢に剃刀を呑とみて懷妊す。みる所の夢を夫にかたる。夫云、汝かはらめるところの子、さためて男子にして一朝の戒師たるへき表示也云々。其後母ひとへに佛法に歸して、出生の時にいたるまで、魚鳥のたくひをくはす。長承二年癸丑四月七日午時におほえすして誕生す。于時奇異の瑞相おほし。知ぬ、権化の再誕なりといふことを。昔世尊の誕生には瓊妙の蓮足を受けて七歩を行せしめ、今聖人の出胎には奇麗の幡天に飄て二流くたりけり。みる人掌をあはせ、さくもの耳をおとろかさすといふことなし。四五歳以降その性成人のことし。同稚の黨に卓礫せり。また動は西の壁にむかふくせあり。人これをあやしむ。⁽³⁾

〈図画の解説〉

岩間観音に祈る図につづき、門の外に馬とその手綱をもつ男性、木の上には両幡がたなびき、門の方に向かって祈禱をする男性が五名いる。僧侶(墨染めの衣で、襟が立っている)と青い衣の僧侶、白の狩衣に立烏帽子の男(漆間時国か)、青色の衣に折烏帽子の男と白の衣に折烏帽子の



国指定文化財

男である。その左側では、左上半身が露出し弓を構える武士一名と、白装束の陰陽師、陰陽師の持つ札を受け取るうとしてゐる男がいる。家の中には、外の様子を眺める僧侶、中央の部屋に妊婦の秦氏と介助する女性が三人いる。妊婦の秦氏とひとりの女性は、白の衣であるが、あとの二人は、赤地の衣に、白や薄茶色の羽織を着ている。左の部屋には、幼児が壁に向かい座っている。一見すると、後ろ姿を描いているように思ふかもしれないが、本文にある「西の壁にむかふくせあり」に基づいて、幼少期の法然上人の姿を示した絵図であることが分かる。妊婦がいる部屋には、青地の屏風が置かれ、白縁の畳が用いられている。

一一四 小結

以上、三絵伝における出産場面の本文と図画に描かれた人物、部屋の設えを示したが、ここで一度その内容を整理すると次のようになるだろう。

『善導寺本』は、奥書によれば嘉禎三(一二三三)年の成立である。現存するのは、室町時代の転写本であるといわれ、出生場面に関しても、他本に見受けられない素朴な絵と本文である。⁴⁾

まず『善導寺本』の本文の特徴の一つに、画中詞が挙げられる。画中詞とは、画の中に添えられた画の説明文で、この場面では、「如来滅後二千八十二年」から「崇徳院長承二年」までの文言が絵の脇に添えられている。一方、

『善導寺本』より制作年が下る『琳阿本』『拾遺古徳伝』には、画中詞がなく、詞書のみとなる。具体的な異同を挙げると、後者の二絵伝には「長承二年癸丑四月七日」の「午ノ正中」「午時」と日付、時刻が記されている。

またその他の異同を示すと、『琳阿本』『拾遺古徳伝』には次の点に加えて述べられている。

- 一、妻秦氏が剃刀をのむ夢を見て懐妊し、それを夫に伝える。
- 二、夫は生まれてくる男子が、一朝の戒師となることを告げる。
- 三、母は一心に仏法に帰依し、出生の時まで魚鳥を食べない。
- 四、法然上人が生まれると様々な奇瑞があった。具体的には、天からふた幡がたなびいたことである。

『拾遺古徳伝』はこの四点にとどまらず、更に詳細な本文となっている。

次に、絵画における三絵伝の共通点を示すと、①妊婦秦氏と介助する女性複数名、②出産の無事を祈る男性複数名、③外で、弓を構える武士一名が挙げられる。

『琳阿本』『拾遺古徳伝』の二絵伝に見られる特徴は、①門の外で、馬とともに待っている男性一名、②陰陽師が描かれている点、③木や屋根の上といった屋外に幡がたなびいていることである。さらに『拾遺古徳伝』には「夫婦心をひとつにして仏神にいのる殊観音云々」の文言通り、観音に祈る夫婦の様子が描かれている。

三絵伝の制作は、古い順に『善導寺本』、『琳阿本』、『拾遺古徳伝』であるが、本場面に関する本文・絵の双方で『拾遺古徳伝』が一番詳細なものとなっている。

ちなみに、出産に際して陰陽師が占いをしている描写は、『北野天神縁起絵巻』や『餓鬼草子』などの絵巻に用例を見いだすことができ、当時の出産儀礼の中の一環として位置づけられていたと考えられよう。⁵⁾そこで、『北野天神縁起絵巻』や『餓鬼草子』などの「出産場面」の先行研究などを踏まえて、当時の出産儀礼を具体的に考察してみたい。

二 『北野天神縁起絵巻』（『承久本』）における出産場面

『北野天神縁起絵巻』（『承久本』）は一二一九年から数年の間に成立した絵巻である。⁶⁾加須屋誠氏によれば、同絵巻第八巻にある六道絵の人間界は、生苦として出産場面が描かれているとの指摘がある。⁷⁾

図画を説明すると、一番奥の部屋に妊婦が女性に抱えられ、いまにも出産間近の様子が描かれている。その部屋の手前がある簀子の上では、弓を持った武士が矢をつがえずに立っている。この武士は「鳴弦」という魔除けを行っている。鳴弦の武士の右には、扉に顔を隠した人物が一人描かれている。その右隣の部屋には、茶色の衣を着けた男がひとりいる。庭では、陰陽師が占いを行う中、竿に占いの結果を巻きつけたと思われるものを運ぶ男性が二人とそれを受け取る立烏帽子の男がいる。左隣の部屋では男性十二名が車座になって宴会が行われている。男性のくつろぐ雰囲気とは対照的に、妊婦の苦しみ様子が伝わってくる。この場面に関して稲本万里子氏は、「生まれ出づる赤子の姿は描かれず、産み落とす妊婦の姿が描かれる」と指摘している。⁸⁾法然伝の三絵伝においても、「赤子の姿」

は描かれず、両幃が天から舞い降りて、庭の木にたなびく様子が描かれている。⁹

この「両幃」のたなびく絵図が出産の無事と祝いを象徴していると考えよう。¹⁰

三 出産場面における白

前述の加須屋氏は、平安時代の貴族の出産に際して、『紫式部日記』の中宮彰子の出産場面に注目され、白を基調とした部屋の設定や、衣装について詳細に論じられている。¹¹

氏は、中宮彰子の出産場面の調度品に関して『御産部類記』内『不知記』の次の記録、すなわち

寛弘五年九月十一日、戊辰、天晴、上東門院に於て御産事有り、是より先十日暁更より、御気色有り、仍ち彼日寅刻、撤尋常御帳を撤し、白木帳、白綾面御屏風十二帳、御几帳を立て、白端差御座を供す。¹²

に関して、「この屏風は―中略―五粉（胡粉）塗りの白木御帳や縁に白綾を使った上畳などとともに一条天皇より下賜されたもの」で彰子の出産を描いた安田靫彦作の『御産の袴』を取り上げ、「描かれた個々のモチーフを『紫式部日記』から読み解き」妊婦彰子、憑坐の女性、散米する男性の衣装が白で統一されていることを指摘している。また、平安時代の『餓鬼草子』（東京国立博物館蔵）について、この時代の出産形態が座産であり、前後から妊婦を介助する助産師がいることを述べている。加えて、

出産に際しては、この種の餓鬼や物の怪など目には見えない異界の者が赤子や妊婦に忍びよると信じられていた。だからこそ、それら悪しき侵入者に対する対抗措置として、産室のとなり画面向かって右側の別室には僧侶が控えている。そして同じ部屋の手前にいる女性は憑坐なのだろう

とし、

白は餓鬼や物の怪などの穢れた者の侵入を断じて許さない象徴として、かつて現実的にも妊婦自身と彼女の安産を願う周囲の人々の心に安心感を与えたに違いないということだと言及されている。¹³

これらの出産儀礼が、法然伝ではどのように描かれているだろうか、〈絵画〉の中で白色に注目して、考察を加えたい。

『善導寺本』には、妊婦秦氏と介助する女性、外で弓を構える武士、外で祈る男性が白の衣服を身に付けている。また妊婦のいる部屋に、白縁の畳が用いられている。

『琳阿本』には、家の中に向かって祈禱をする男性の三名の内のひとりが白地の狩衣に立烏帽子を着けている。そして妊婦の秦氏と介助する女性、陰陽師が白い衣服を身に着けている。妊婦のいる空間にのみ、白縁の畳が用いられている。

『拾遺古徳伝』には、祈禱をする男性五名の内、一人が白の狩衣に立烏帽子、もう一人が白の狩衣に折烏帽子を着けている。妊婦の秦氏とひとりの女は、白装束である。他二人の女性も赤地の衣の上に、白や薄茶色の羽織を着ている。陰陽師も白の衣服である。妊婦がいる部屋には、青地の屏風が置かれ、白縁の畳が用いられている。

以上が、三絵伝における「白」を身に纏う人物や、白の用例である。

このように比較した時、三絵伝に共通する人物がいる。それは祈りを捧げる男性（立烏帽子）で、おそらく法然の父、漆間時国であろう。¹⁴

また、外で弓を構える武士、陰陽師、妊婦秦氏と介助の女性が白の衣服を身に着けていることは、『紫式部日記』や『餓鬼草子』『北野天神縁起絵巻』と合致しており、当時の出産儀礼に基づいて描いていることが分かった。そして、『御産部類記』に「白端差御座」とあるように、妊婦の部屋には白縁の畳が三絵伝に描かれている。ちなみに、隣室の畳の縁には、青や銀色で模様が描かれている。このことから、三絵伝の画師は、意図して、妊婦秦氏がいる空間にのみ白縁の畳にしていることが分かるのである。¹⁵

四 出産における墓目・鳴弦

鳴弦については、石岡久夫氏による詳細な論考があるように、古来出産時において、悪霊退散を目的として、「墓目・鳴弦の儀」が行われてきた。

『有職故実辞典』（吉川弘文館、平成八年）によれば、「鳴弦」とは、弓に矢をつがえず、張った弦を手で強く引きならして、その音によって妖怪・悪魔を驚かし、邪気・穢れを払うことで、出産とそれに続く湯殿の儀の際の鳴弦は、最もよく知られているとあり、また「墓目（響目とも）」については、

響目（ひきめ）の音響は、破邪・降魔の呪力を発顯するという信仰から平産を祈って産所で誕生響目を射ることが恒例となつた
とある。

石岡氏は、武家の誕生儀式に関して『成氏年中行事』にある「鎌倉管領家の誕生鳴弦の儀」を引用され、次のように述べられている。誕生の時鳴弦並びに墓目の射が行われ、鳴弦役は二人で産児の泣声が聞こえるたびに、弦打ちをなし、昼夜の別なく詰めて交替に油断なく行つたのである。男子の時は三回、女子の時は二回弦打ちするのが、定法であつた。（中略）鳴弦役、墓目役が白直垂を着用したことは將軍家の場合と同じである。

かように、鎌倉及び室町時代には平安以降の宮中行事と異なり、読書がない代わりに鳴弦に附帯して墓目の射が行われた。¹⁷つまり、鎌倉・室町時代には出産の無事を願う「鳴弦」「墓目」の儀が執り行われ、衣装は白直垂を着用していたのである。

ここにおいて、法然伝の出産場面、外で弓矢を構える武士が、この「鳴弦」「墓目」の儀式を執り行っている人物であると解釈できるのである。

五 後世の絵伝における出産場面

先に挙げた『伝法絵』系統の三作品以外で、管見に入る限り「弓を構えた武士」が描かれている作品は次のとおりである。

絵巻では、『法然聖人絵』（弘願本）。掛幅には、『法然上人絵伝』

（三重県・西導寺）、『法然上人絵伝』（山梨県立博物館蔵）、『法然上人絵伝』（広島県・光照寺）、『法然上人絵伝』（愛知県・妙源寺）、『法然上人絵伝』（愛知県・光明寺）の五作品が挙げられる。¹⁸

描かれていない作品は、『法然上人行状図画』と『法然上人絵伝』で、いずれも京都府・知恩院所蔵の作品である。¹⁹

これだけの複数の絵巻や掛幅の出産場面の一部に「弓を構えた武士」が描かれていることから、出産において「墓目・鳴弦の儀」が人口に膾炙していたと想像できよう。

また、「墓目・鳴弦」以外においても、『伝法絵』をはじめとする各法然伝の出産場面に「白」を重んじる当時の風習が見受けられた。妊婦秦氏の装束や、介助する女性たちの衣服、上置の縁、さらに、「墓目・鳴弦」の武士も『善導寺本』においては、「白」であった。これは、『紫式部日記』や『御産部類』に詳細に書かれているように、出産場面に「白」を用いる儀式に則っているのである。

ちなみに、法然滅後、約百年に制作された法然伝の集大成である『四十八巻伝』には、【一】で取り上げた三作品と大きな違いが数点ある。絵図においては、「墓目・鳴弦の儀」をする武士は描かれることがなく、陰陽師の姿もいなくなるのである。²⁰

六、『善導寺本』上巻末尾の和歌

『善導寺本』は現在四巻仕立てになっているが、本来は上下二巻から成ることが指摘されている。²¹ その上巻末尾の跋文の署名の後に（現・二巻の末尾）に二首の和歌がある。

おもひ入やすち箏ゆみはりの月のつよくもひくかたそかし
弓はりの月ハ大地を的としのおもひ入よりはつしけそなき

まず、読み方を示してみたい。

おもひいる やすちそうこつゆみはりの つきのつよくも ひ
くかたぞかし
ゆみはりの つきはだいちをまとしのおもひいるよりは
づしげぞなき²²

歌の意味は次のようになるだろう。

〔極楽浄土への〕思いを込めた矢が願いにそうように

西の方向に沈む弓張月の弓をつよく引くことよ

〔西に沈む〕弓張月は大地を的とするような弓の形をしている

極楽浄土への思いを入れて射る矢は決して外れることがない

この二首の和歌は、「極楽往生への思い」を「弓張り月」に譬えて詠んだ歌となっている。

「弓張月」は上弦の月とも呼ばれ、毎月七日～八日の月の呼称である。月の満ち欠けの姿が「弓を張っている姿」と似ていることから、この名称となっている。²³

七日、八日の日付を聞いて思い出されるのは、法然上人や釈迦の誕生である。本稿【一】でも述べたが、法然上人は四月七日生まれ

で、空にはまさに「弓張月」が輝いていたのである。さらに看過してならないのは、和歌二首の「弓張り月」の「弓」と法然上人の出生場面に描かれた「暮目・鳴弦の儀」の「弓」とが意図的に連関しているのではないかと考えられる点である。

まず和歌の二首目から、解説したい。『善導寺本』をはじめとする絵伝の出産場面に、「家の外」で「弓を構えている」武士が「大地を的として」いまにも「射る」姿が描かれていたことを思い出し、²⁵「矢」を放てば、必ず大地にささり、「矢をはづす」ということはいのである。

そして、この弓矢同様に「必定」である事柄として浮かんでくるのは、「阿弥陀佛の西方極楽浄土への往生」ではないだろうか。つまり、「弓矢で大地を射れば外れることがない」ことと、「阿弥陀仏の名を称える者は、一人としてその救済から漏れることはない」という誓願（第十八願）とを掛けているのではないだろうか。

さらに、「月は東から昇り、西に沈む」²⁶。その西には「西方十万億土」の彼方に阿弥陀仏の極楽浄土があると説かれている。したがって、月が沈む方向が「西」であることは、この和歌の作者が「弓張月の沈む方向」に「極楽浄土」を暗示して詠み込んだと想像できるのである。例えば、月の沈む方向に極楽浄土を暗示させた用例に、西行の和歌を挙げることができる。

見月思西（つきをみてにしをおもふ）といふことを
山の端に隠る、月を詠（ながむ）れば我も心の西に入るかな

『山家集』八七〇²⁵

易往無人（ゆきやすくしてひとなし）の文（もん）を
西へ行（ゆく）月をやよそに思ふらん心に入らぬ人のためには

『山家集』八七二²⁶

観心（くわんじん）

闇晴（はれ）て心の空に澄む月は西の山辺や近くなるらん

『山家集』八七六²⁷

このように「月が沈む西」に「極楽浄土」を暗示する手法には前例があるのである。以上のことを念頭に置き、次に、一首目の和歌を解釈してみたい。上の句は、「おもひ入やすち箏ゆミはりの」であるが、「おもひ入」とは、極楽浄土への往生の思いを入れて弓を射る、と解釈できよう。次に「やすち箏」であるが、「やすち」は「矢筋」のことで「箏」の読み方が難解であるが、歌意を重視して解釈すると、「そうのこと」あるいは、「そうこと」と読ませる音通による当て字であろう。そう考えて解釈すると「矢筋に沿うように」の意となるろう。²⁸

下の句「月のつよくもひくかたそかし」であるが、まず「月」とは、「弓張り月の形をした弓」を指し、その月の形をした弓を強く引く様子や方向を詠み込んでいるとなるろう。

以上の考察をまとめると、この二首の和歌は、「弓張り月」を意識して詠出し、出産場面の「暮目・鳴弦の儀」の絵と通底すると言えるのである。おそらくこの和歌の作者は、画師にこの絵図の構図を細かく指示しているのではないだろうか。

つまり、上巻冒頭で誕生する子が、この和歌に詠み込んだように阿弥陀仏の教えを弘める人となるという思いを込めて、「首尾照応」するように絵と和歌を配置していると考えられるのである。

おわりに

小稿では『法然上人伝法絵』、『琳阿本』、『拾遺古徳伝』の〈法然上人の出生場面〉、特に絵画と『善導寺本』上巻卷末の和歌に注目して、各絵伝を読み解くことを試みた。

その結果、次の五点が明らかとなった。

一、法然伝は、制作年次が下るほど、本文・絵の双方において、より豊かになるが、共通して描かれる人物として、「外で弓を構える武士」がいた。

二、同時代の絵巻同様に、「産まれる赤子が描かれず」、代わりに、「幡がたなびく」様子を描くことで、出産の無事を意味していることが分かった。

三、外で弓を構える武士、陰陽師、妊婦と介助の女性が白の衣服を身に着けていることは、『紫式部日記』や『餓鬼草子』『北野天神縁起絵巻』の出産場面と合致しており、当時の出産儀礼に基づいて描かれたものであった。また『御産部類記』と同様、妊婦の部屋には、白縁の畳も意図して描かれていることが明らかとなった。

四、鎌倉・室町時代には、出産の無事を願う「暮目・鳴弦」の儀が、白直垂を着用した人物によって執り行われていた。法然伝

の出産場面において、外で弓矢を構える武士に関する論文は管見の限りではないが、当時の出産儀礼に関する記述と一致することからも、この武士が「暮目・鳴弦」の儀式を執り行っている人物であると解釈できるのである。

五、『善導寺本』上巻卷末にある二首の和歌について、「弓張り」の言葉に注目して解釈したところ、前述したような歌意を有することや、巻末の和歌と冒頭の絵画が照応していることが明らかとなった。

繰り返しになるが再度重要な点をまとめると、「弓張り月」とは毎月七、八日に出る月の名称で、月の満ちかけが、弓を張る姿に酷似していることからこの名称がついている。奇しくも、法然上人の誕生は四月七日で、この日の空に輝いていた「弓張り月」は、法然上人の誕生の象徴となろう。

そして、巻末二首の和歌の歌意をまとめると、

○極楽浄土への思いを込めた矢を、西に沈む「弓張り月」のように、今、弓を強く引くことよ。

○「弓張り月」の姿のように、武士が大地を的として射る「暮目の弓」は、必ず大地に命中して外れることがない。その弓矢が外れないのと同様に、阿弥陀仏の救済も、必定なのである。となる。

このように解釈すると、『善導寺本』は、上巻冒頭に描かれた出産場面の「弓矢を射る武士の姿」に始まり、上巻卷末の二首の和歌の「弓張り月」に「法然上人の誕生」と「浄土往生」を詠み込む和歌を配置する「首尾照応」の構造となつてということが明らかとなつ

てくるのである。

【付記】

本稿を成すにあたり、絵巻掲載の御許可を賜りました浄土宗大本山善導寺様、妙定院様、常福寺様に厚く御礼申し上げます。

善導寺蔵『本朝祖師伝記絵詞』（『善導寺本』）：福岡県指定文化財
妙定院蔵『法然上人伝絵詞』（『琳阿本』）：東京都港区指定文化財
常福寺蔵『拾遺古徳伝』：国指定文化財

【注】

- (1)『本朝祖師伝記絵詞』（『善導寺本』）五〇七頁。〈法然上人絵伝集成1〉浄土宗、平成二十年
- (2)『法然上人伝絵詞』（『妙定院本』）四〇八頁。〈法然上人絵伝集成2〉浄土宗、平成二十年
- (3)『拾遺古徳伝』（『常福寺本』）三〇九頁。〈法然上人絵伝集成3〉浄土宗、平成二十一年
- (4)中井真孝「『伝法絵』の善導寺本と国華本」一九四頁（『法然上人絵伝集成』二 所収）
- (5)鈴木敬三編『有職故実大辞典』「陰陽師」項目（平成八年一月、吉川弘文館）
- (6)小松茂美編『日本絵巻大成21 北野天神縁起』（『承久本』図版解説）中央公論社、昭和五十三年。
- (7)加須屋誠氏「仏教説話画のなかの「生苦」」（『生老病死の図像学 仏教説話画を読む』、筑摩書房、平成二十四年）六十七頁

八十三頁。

- (8)稲本万里子氏「描かれた出産」一一三頁。（『生育儀礼の歴史と文化 子どもとジェンダー』、森話社、平成十五年）
- (9)注(8)一一二―三頁。また「幡（旗）」に関しては、『大辞泉』の「幡」には「仏・菩薩の威徳を示すための仏具」とあり、『民俗学辞典』（東京堂出版、昭和五十九年）には、「旗に靈魂が宿」る性質であることが示されている。
- (10)幡の色は、『善導寺本』が白色、『拾遺古徳伝』『琳阿本』が五色である。
- (11)加須屋誠氏「白と宗教」（『國文學』第五十一巻、二号、學燈社、平成十八年所収）
- (12)注(11)および、宮内庁書陵部編『御産部類記（上）』（図書寮叢刊、明治書院、昭和五十六年）五十四頁。なお、引用部分の訓読は加賀屋氏の論考に従った。
- (13)注(11)に同じ。
- (14)玉山成元・宇高良哲（『法然上人絵伝講座』浄土宗、平成十六年）三〇十四頁。
- (15)屏風に関しては、『拾遺古徳伝』にのみに描かれており、上半分が白地に模様、下半分が青地である。その色使いの意義は、現段階では不明である。屏風に関する詳細な考察は、榊原悟氏の「屏風Ⅱ儀礼の場の調度―葬送と出産を例に」（『講座 日本美術史』第四巻、東大出版会、平成十七年）がある。
- (16)石岡久夫「鳴弦の史的考察」（『國學院雑誌』第六十一巻、八・九号、昭和三十五年）

- (17)『殿中以下年中行事』(『群書類従』、八木書店) 三二八頁
- (18)ここに挙げた掛幅が作られたのは、南北朝時代(十四世紀)であるとい指摘されている。『法然上人八百回忌 特別展覧会「法然 生涯と美術」』京都国立博物館編、平成二十三年、一四八～一六〇頁。
- (19)注(18)「出品目録」二七六、八頁。
- (20)『法然上人行状画図』(『四十八巻伝』十七～二十頁。〈法然上人絵伝集成4〉浄土宗、平成二十六年)
- (21)梅津次郎「法然上人伝法絵」一二三頁(『絵巻物残欠の譜』角川書店、昭和四十五年)、中井真孝「『伝法絵』の作者と成立」一六九頁(『法然上人絵伝集成』二 所収)
- (22)三句目の「まとしの」の「の」は「て」とあるべき所か。
- (23)『日本国語辞典』「かみの弓張り」の項。
- (24)『佛説阿弥陀經』に「爾時佛告長老舍利弗。從是西方過十萬億佛土。有世界名曰極樂。其土有佛號阿彌陀。今現在說法」(『大正新修大藏經』No.366 鳩摩羅什譯346c10～12)とある。
- (25)『山家集』八七〇番歌(『山家集・聞書集・殘集』和歌文学大系 21、一六四頁、明治書院、平成十五年)
- (26)『山家集』八七二番歌 注(25)に同じ。
- (27)『山家集』八七六 注(25)一六五頁。
- (28)『古事類苑』(樂舞部、洋卷第二卷、六四五頁)「箏」の項に「シヤウノコト、又サウノコトト曰ヒ、又單ニサウトモ稱ス」とある。